はじめに

学校長　小　林　洋一郎

本校は、個性（発達と障害）に応じた教育を実現するため、平成４年度よりコミュニケーションに視点をあてて研究に取り組んできた。子どもたちの発達にとってまた社会生活において重要な要素は、コミュニケーション能力であると考えられたからである。教育は生活の必要から始まり、社会は人と人との関係により成立している。昨年度は何等かの障害をもった一人ひとりの実態把握と個の目標を重視した指導に中心がおかれた。今年度はそれらを継承しながら、コミュニケーションの観点が拡大された。すなわち、教育におけるコミュニケーション能力の発達は、一人ひとりの子どもの表現力、主として会話能力（言語的、非言語的）に対応した指導を考えるばかりでなく、教師と子どもとの間に相手を受容し、感情や知識を共有していく授業過程が重要な課題であると認識された。

養護学校の子どもたちは何等かのコミュニケーション障害を負っている。ただし、コミュニケーション障害というのは、特定の器官や疾病とつながる障害や障害児と結び付くのではなく、細分化してしまった障害領域を再度その関連性において再構成し再検討するための包括概念であるという。

コミュニケーションは、従来から情報の「伝達」であり、個体による情報の［受容→処理→表出］のモデルとして描かれた。一方、他者との「関係」は認知情報ではなく、感情、情報の交流に基礎をおくことなどをもとに「共感」モデルが提案されている。鯨岡氏は、コミュニケーションの発達を「情動共有を土台として、その上に情報の授受が積み重ねられ、次第に完備していく過程」であり、しかもこの過程は、個体内機能が完備していく過程であるとともに、コミュニケーションをかわす他者との関係が次第に拡がっていく過程でもあると考えている。（平成５年度特殊教育シンポジウム報告書、国立特殊教育総合研究所、平成６年３月）

障害児教育の場において、子どもと教師が接する場面はすべてコミュニケーションが問題になる場面と考えられる。指導や援助のとらえ方も、子どものあるがままを「受容する」のか、あるいは子どもの発達の「最近接領域」に働きかけて「変容させる」のか微妙な関係が問題となる。

教育は、一人ひとりの子どもが自立していくのを援助する過程である。そのためには生きる知恵としての文化の伝達が不可欠である。養護学校においても、人間的自立をめざして、様々の生活経験と結びついた知的追求の方法を獲得させ、コミュニケーション能力を高めていくことが必要である。

このような観点から、生活単元学習や課題学習を支援する授業づくりや個人事例の実践的研究の成果を報告し、今後の教育実践に少しでも役立つものとなれば幸いである。

最後になりましたが、鳥取県教育委員会、鳥取市教育委員会、鳥取県盲・聾・養護学校長会、鳥取県心身障害児教育研究会、鳥取県東部地区心身障害児教育研究会、鳥取市小学校教育研究会、鳥取市中学校教育振興会から、研究発表大会のご後援を頂いたことに対し、また、ご指導を頂きました先輩各位、鳥取大学教育学部教官各位に対し深く感謝の意を表します。